
200文字の彼女達

也屋拓郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

200文字の彼女達

【Nコード】

N6055Z

【作者名】

也屋拓郎

【あらすじ】

200文字でつづられた彼女達の恋心。

天野傘音

彼女は夏の風物詩である花火とは対極的に違う魅力的なものがある。

一瞬の輝きを、命の輝きを花の如く咲き誇り、そして消えさる美しさ、潔さとは違い、彼女は『梅雨』のような美しさがあった。傘を差さない人の肩を叩く雨のようにどんなに小さくても必死に何かを残そうとする彼女の儚さ、そして傘を打ち弾ける音のような笑いをする彼女は雨の中、傘を差しながら歩く姿はとても可愛らしい。ほんの少しだけ笑って僕を見つめるのだ。

彼方

僕は彼女の後ろを歩く。

君の座る車椅子のレバーを持って歩く。

「ごめんね」

と君は少し悲しそうに言った。僕は寒さでつまった鼻をすすり、別にと素っ気無く答えた。

木枯しで枯れた街路樹は土色に変色した葉を揺らしながらゆっくりと歩んでいる僕らを嘲っていた。

「まだまだこれからさ」

「うん……」

僕はマフラーに顔を深くうずめた。

溢れそうになる嗚咽を飲み込み、寒さで赤くなった鼻先を隠して僕は白雪のような項を見つめていた。

風邪

風邪を引いた。それはもうひどいやつを。

朦朧とした意識の中、吐き気とゆがむ感覚、そしてひどく負担をかける頭痛と戦う中、誰も僕のことを看病してくれる人はいなかった。親は共働きで僕は一人っ子だ。

ぼんやりとした白い壁を見つめるしかできなかった…。

数日経て僕は完治する。

久しぶりの大学に入ると僕の隣に座っていた幼馴染がいなかった。

聞いた話によると僕と入れ替わりで休んだらしい。

しばらく考えると笑うしかなかった。

君の声

ある日、君はこの声が嫌いといった。

いつから嫌いなのか？ と聞くと昔からという。

何で嫌いなのか？ と聞くとハスキー声だからという。

じゃあ…僕は好き？ と聞くと恥ずかしがる。

嫌い？ と聞くと顔を赤くし否定を即座に言う。

僕は君の声が好きなんだけどねえというと君は驚いた顔をする。

君の声は合唱コンクールでよく外れて聞こえるから。というふうな
れつつらをする。

そんなマイナスばかりの君の声。

君は暫く固まった後、好きと言った。

バス停

十二月になっても雪は降ってこない。

しとしとと冷たい雨が僕の体温を奪う。深々と降る春雨と違って冬の雨はひどく重かった。

後ろには屋根付きのバス停があって中に彼女がいた。

こないね。

もうすぐだよ。

短いやり取りだが僕らはお互いの気持ちを確認し、理解できた。バスがやってきた。僕の背中に触れる暖かく心地よい掌。

ありがとね。

どういたしまして。

ゆっくりと扉を開けた。

またね。

彼女は小さく呟く。もう二度と会えないのに。

白雪の帰り道

手をつなぐと君は言った。僕はもちろん突然のこと過ぎて少し裏返った声を上げてしまった。

「な、なんで？」

「私手袋持ってないし。寒いじゃん」

空を見上げるとゆっくりと雪が降りだしていた。彼女の手は細く氷のように冷たい印象があった。

「…べつにいいけど」

僕は手をつないだ。だけど彼女はどこか不満そうだった。

「手袋はすさないの？」

「僕が寒いじゃないか」

「うるさい！ 手袋はすせー！」

駄々こねる彼女の手は暖かった。

食いしん坊

彼女はいつも少食だった。といっても僕の食べる量が多いだけで彼女は普通である。彼女と一緒に暮らし始めて一年。もう彼女の食べる量など分かる。

そんな彼女はある日たくさん食べるようになった。僕はその食事に驚かされるばかりだ。

「いきなりそんなに食べてどうしたのさ」

僕はそんなことを聞くと彼女は口に入れていた白米をごくんと音を鳴らして飲み込んだ。

「んーこれから二倍食べないと思ってね」

僕は大人気なく喜んだ。

吐息

はあと君はため息をした。

「ため息をつくと幸せが逃げるよ」

「うるさいな。欠伸よ欠伸」

君は憎たらしげに言う。僕と君はいつも一緒に学校へ行く。その習慣も明日で二年になる。もしかすると倦怠期なのかもしれない…。最近短い会話しかしていないし、もしかするともうだめなのかもしれない。と僕は泥沼に入っていく、君はそんな僕を見て尻を蹴り飛ばした。

「何するんだよ」

「ため息は幸せだからするの」

君は僕を上目で睨んできた。

約束

ピリリと携帯がなる。

表示は彼女だ。

「なに？」

『普通もしもしから言っでしょ』

彼女と僕は遠距離恋愛をしている。お互いが自立したときに会う約束をしていた。本当だったら今日は会えていたが、僕は留年してしまった。だから会うことができない。

「んでなに？」

どうせ、がんばとか言うだろうなって思った。これ以上僕を惨めになるのはいやだから電源を切る準備をした。

「会いに来ちゃった」

同時に僕の後ろに彼女が飛びついてきた。

待ち合わせ

残業につかまり、僕は帰ることができなかった。

今日は彼女の誕生日で一緒に買い物に出かけようと思っていたの
に、思ってもどうしようもないことで、僕は、カタカタと鳴るキー
ボードの打鍵音に哀愁を感じつつ仕事に励んだ。

仕事が終わり、僕は急いで待ち合わせへと向かう。四時間も遅刻
だ。

会いたい気持ちが不思議と足は前へと早くする。

彼女が待つ場所…もう家に帰っているかも。

「おかえり」

そんな僕を彼女は笑顔で迎えてくれた。

無意識

「僕は貴方のことが好きでした」

無意識のうちに僕は過去形を使っていた。言い放った言葉を受けた君は驚いた顔をする。

「なんで過去なの？」

僕もよく分からない。なぜ過去を使ったのか。緊張した僕は言い返す言葉が無かった。

空回る気持ち。何か言わなきゃと思い口を魚のように開くが漏れ出てこなかった。

彼女は笑う。僕は粘質性の唾液を飲み込んだ。

「私は君のこと好きよ。昔からずっとね」

焦る気持ちを拭う為に彼女を抱きしめた。

年下

彼女はかわいい。

故に年下だ。

僕が誕生日の時にあげた髪留めは渡してからずっと毎日のように身に着けている。

そんな彼女はあるとき僕を呼び出し告白した。

「す、好きです！」

真っ赤になって半場叫ぶ彼女。

耳まで赤くなって、告白を言った後あうあうと言いながら返事を待っていた。

さて、どうしようか。こんな可愛い彼女を見るのは貴重である。

返事をするのが勿体無い位に。

「僕も好きだ」

その時の笑顔は、今までで一番綺麗だった。

喧嘩

「あんななんか死ねばいいのよ」

学校の帰り道、彼女は唐突に言う。目尻を吊り上げて憤怒している。

「僕何か悪いことしたかな」

「知らないうちに私の気分を損ねたわ」

「ご教授願おうか？」

僕はそういつて彼女のほうを振り向いた。

「私達は本当に付き合っているの？」

「付き合ってるから一緒に帰ってるんでしょ？」

出なければこういう話もしてないし。

「違う」

「んじゃ何に怒ってるの？」

僕が聞くと彼女は僕の隣に並んで腕を組んだ。

猫

捨て猫を見つめる彼女がいた。明日は雪が降ると聞いたような。
「拾うのか？」

僕は問う。

「私のところ飼えない」

彼女は細い指でか弱くなく猫の頬を撫でる。

このままだと猫は死ぬだろう。

「僕が引き取るよ」

僕は猫の脇に手を入れる。細い胴体は栄養失調だと顕著だ。体は
油や汚れで黒い。だけど僕は猫の体を撫でた。

そいつは僕の所で住んでいるがぜんぜん懐かない。

「猫は気に入った人にしか懐かないのよ」

もう一人はそうでもないが。

拒絶

「一緒に帰ろう?」

「いやよ」

即答だった。僕たちはまだ付き合って一週間も経っていない。

「何で? 僕たち付き合っていないの?」

「付き合ってるわ」

彼女は僕に目をあわさないですたすと歩く。僕は彼女の後を追いかけるように歩いた。

「なら帰ろうよ。家まで送るよ?」

「もっとだめよ」

またしても即答。こんなに拒絶されると流石に僕でも悲しくなってしまう。

「だからなんでさ」

最後に理由だけでも聞いた。

「だって恥ずかしいもの」

野球拳

彼女は野球拳が好きだ。

なぜなら僕の羞恥な姿を見たいらしいから。もちろん野球拳が好きだということはじゃんけんも強い。なんでも思っくらしいに強いのだ。

「誰にもでも勝てるというわけじゃないわ」

そういつて彼女は僕の着ているものを剥がしてゆく。

ある日僕は野球拳で一回だけ彼女に勝った。僕は喜んで上着を脱がす。

「分かった？」

「何が？」

「私は何故貴方に勝てる理由」

僕ははっとしてすぐに顔を赤くし言った。

「参りました」

インドア

「初詣いけないな」

親戚がなくなつたため僕は彼女と神社にいけない。彼女はそれを知つて僕の隣にいた。

「そうだねー」

「ごめんね」

「全くだ」

強い口調で僕に言う。僕はものすごい申し訳ない気持ちでいる。

「だけど、まあいいかな」

「なんで？」

だってと彼女は言葉をつむいだ。

「私人ごみの中嫌いだし。外にいてぶらぶらするよりさ部屋でコタツに入つて一緒にぬくぬくしてる方が私好きだもん」

僕は笑つた。

本当は外の方が好きだろ？

流星

あ、と君は声を漏らした。

「流れ星！」

今更上を向いても遅かった。あるのは街灯の光と小さな光と飛行機の光だけだ。

「よくみえたね」

「私目がいいもん」

テンションが高い彼女。僕はそんな彼女を見てくすくすと笑った。

「僕は流れ星が見えなくてもいいなあ。願いなんて叶わないし」

「現実主義だね」

「まあ現実主義だよ」

だけどねと僕は言葉を繋げた。

「願わなくても欲しいものは手に入ったから」

とたんに君は顔を赤くし僕を蹴った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6055z/>

200文字の彼女達

2012年1月12日19時58分発行